

下野新聞
認知症カフェプロジェクト
過去の特集はこちら!



Vol.30 とちぎオレンジガイドス

本年度の認知症カフェプロジェクトのテーマは「認知症のこれまでとこれから」です。昨年11月24日、那須赤十字病院(大田原市)で「もの忘れ外来」を開設する伊藤雅史脳神経内科部長が「もの忘れ外来と医療現場からみる認知症について」と題して、宇都宮市のベルヴィ宇都宮で対談しました。聞き手は認定社会福祉士の永島徹さん(佐野市) 企画制作/下野新聞社ビジネス局

下野新聞 認知症カフェ プロジェクト2024



認定社会福祉士、日本認知症ケア学会理事

永島 徹氏



那須赤十字病院 脳神経内科部長

伊藤 雅史氏

永島 伊藤先生は那須赤十字病院で「もの忘れ外来」を開設してあります。どのような経緯で認知症に関わるようになったのですか。
伊藤 大学では神経免疫の研究をしていました。急性期疾患の治療にやりがいがあったのですが、もともと患者とゆっくり時間をかけて話をしたり年配の方が好きだったので2005年、獨協医大に認知症センターが開設された際に外来担当の一人として運営に携わりました。その後、宇都宮市内の病院で「もの忘れ外来」を開き、19年から那須赤十字病院脳神経内科に勤務しています。

永島 伊藤先生は患者と向き合ってこられたと思いますが、最近感じることはありますか。
伊藤 新薬の発売がニュースになり、患者から新しい情報についてどんな質問を受けるようになりましたね。ただ残念ながら認知症に注目が集まっているにもかかわらず、地域によって医療に差が生まれています。医療従事者や介護職など専門職の連携や勉強会、専門病院である認知症疾患医療センターの有無などです。患者はどの地域にもいますが、医療圏としてばらつきや差があると感じます。

不安が怒りを誘発

永島 「親や配偶者が忘れっぽくなってきた、認知症かもしれない、どうしよう」と思った時に、家族はどうすればいいですか。
伊藤 病院へ行くことは大切ですが、まず考えていただきたいのは、もの忘れになってきた親、配偶者らがどのような生活を送っているか、知ることで

永島氏 ますます重要な連携／医療圏でばらつきも 伊藤氏

す。刺激がなくなるとただ過ごすという毎日では脳は年齢とともに衰えます。その上で受診していただき、内科的な病気がなくなるもの忘れなのか、脳に病気があるのかなどを調べて、認知症の診断をします。原因を探ってもらうためにもの忘れ外来にかかるんだ、という気持ちで利用してください。

永島 認知症と診断した後、どのようなアドバイスをしていますか。
伊藤 認知症という病気でもの忘れになるのは仕方がないことですが、認知症に身体の衰えが加わってさらに認知症が悪化する、という人が多いです。ですから、患者には趣味を持って体を動かし刺激を受ける場に出掛けることを勧めています。家族にはアルツハイマーの基本的な感情は不安で、不安感から引きこもったり怒りっぽくなったりすることを説明します。

また「さっき言ったで分かるの!」と怒鳴ってしまふこともあるでしょう。でもそれは患者には酷な言葉なのです。何回も聞いてくるといことは患者が確認する努力をしていることです。いつか脳の機能がかなり落ちると何回も聞いてこなくなり、何回も聞いて何とかしようとする。介護は大変です。介護は大変です。

永島 介護職員の人手不足が深刻です。
伊藤 報酬や待遇など介護の在り方全体を見直す時期にきています。患者の家族にできることは、介護職のありがたさをきちんと認識し感謝することです。介護職は大変な仕事ですが、患者や家族の感謝の気持ちが仕事のモチベーションになっているのは間違いありません。

永島 人手不足を補うために連携が必要で、患者本人、家族、専門職が連携しながら伴走型の支援をしていくことに加え、地域の皆さん同士でつながりを持ちお互いにかけることをやっていくということも大切です。そうしないと次につながっていく未来は来ないでしょう。栃木県内には、認知症にとても理解のある医師が大勢います。そういった医師たちとも連携していきたいと思っています。



看護・介護専門職や認知症患者家族が参加したオレンジガイドス

栃木県産 とうちあいか (約280g×2パック) 30名様にプレゼント

応募方法はがきに郵便番号、住所、氏名、年齢、性別、電話番号、紙面の感想などを添えて320-8686下野新聞社ビジネス局「とうちあいか」係まで応募してください。1月31日消印有効。賞品の発送をもって発表とします。応募いただきました個人情報、賞品発送・意見分析・下野新聞社主催および後援事業のご案内に使用させていただく場合があります。【下野新聞社ビジネス局】